

## 連載 28 成瀬巳喜男『限りなき舗道』に登場したインテリジェンス（情報戦）の大物・山内光

『キネマ旬報』1934年5月21日号によれば、「封切の成績は普通」。ただし成瀬巳喜男監督への期待値の高さからいえば、「普通」というのは批評家としては不満ということだろう。

すれ違いや偶然の交通事故などが縁で、身分違いの男女が結ばれる。ヒロイン杉子（忍節子）はカフェの女給、相手役の山内弘（<sup>やまのうちひかる</sup>山内光）は格式高い名家の跡取り。夫の愛情だけを頼りに結婚したものの、姑、小姑に受け入れられず、幸薄いヒロインは苦勞をする。典型的なメロドラマの装置である。が、ちょっとひねりが入っていて、そのひねりがまだ足りない、というところだったろう。

カフェの女給、売れない絵描き、駆け出しの女優の群像劇、モダン都市のアパート生活や銀座風俗には、新味がある。デートに使われる映画館の映画、映画のなかの撮影所風景のシークエンスなどは、ちょっとしたメタフィクション、メタシアターの趣向である。

母親と妻の板挟みになったぼんぼんの夫は「君には僕の苦しみがわからないのか？」と愚痴をこぼし、耐えるだけのヒロインではない妻は「苦しんでいるだけではだめ」といさめ、夫をいい人だけど「弱い」と批判し、姑には「あなたが愛しているのは、息子ではなく家名です」と啖呵を切る。サイレント映画なので、すべて字幕のだけれど。そういう点では、メロドラマとして新味があるといえはいえる。

ヒロイン忍節子は、この映画がデビュー作で、<sup>うりぎね</sup>瓜実



晩年の岡田桑三（山内光）

川崎賢子・原田健一共著『岡田桑三 映像の世紀 グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』（平凡社、2002年）書影

<sup>がお</sup>顔の品のいい美女だったが、調べても没年さえわからない。

相手役山内光は、『キネマ旬報』の同記事では「凡技」と一刀両断にされた。美貌と体軀には恵まれているが、演技はいまいちという評価だったろう。

その山内光は本名岡田桑三。1922年から24年にかけてベルリンに留学し、1926年に日活入社、1928年に松竹蒲田に移籍している。1940年まで在籍し、『生活線ABC』（島津保次郎監督、1931年）、『噂の女』（池田義信監督、1935年）、『家族会議』（島津保次郎監督、1936年）、『人妻椿』（野村浩将監督、1936年）などに出演した。

毒にも薬にもならない二枚目俳優のペルソナのおかげで、プロキノ（日本プロレタリア映画同盟）のシンパであり、1929年にはただひとり治安維持法改正に反対して右翼に刺された山本宣治の葬儀を撮影し、フィルムを持ってモスクワ、ベルリンに渡り、エイゼンシュテイン、ティッセ、プドフキンらソ連の大物映画人と交流するという離れ技を演じている。

1933年には、名取洋之助を中心に設立された写真エージェンシー「日本工房」に、木村伊兵衛、伊奈信



『限りなき舗道』（1934）の忍節子

男、原弘らとともに参加した。こののち 1941 年には松竹を退社し、戦時下の対外文化宣伝のために「東方社」を設立して理事長となった。ソ連情報に詳しい、情報戦略の専門家という位置付けであった。「東方社」は、プロパガンダのグラフ雑誌（といっても大判で重厚なものだったが）、『FRONT』を刊行している。『FRONT』のデザインには、山内光こと岡田桑三が親交を結んだエイゼンシュテインのクロースアップ、広角、モンタージュなどの技法が遺憾なく流用されている。